

■ 各サイトにおける普及啓発・学校教育について

活用事例アンケート調査で、活用の事例として多く回答が得られた活動のうち、137件で1番多かった「A_地権者・周辺住民・参加者への普及啓発」、37件で3番目に多かった「B_学校教育」について各地の事例を紹介する（2番目に多かった「D_サイトの保全活動への活用」については、第4章の記載を参照）。

「A_地権者・周辺住民・参加者への普及啓発」は内容が多岐にわたり（表5-7）、寄せられた137件のうち「調査体験会や観察会の開催、ガイド等でのデータ活用」が最も多く40件（29.2%）であった。その中には、カエル類の調査体験と観察会をセットにした親子向け環境教育プログラムを開催した事例（S174 立田山）や、調査結果で得た知見をガイドウォークのプログラムに活かした取組み（S094 能登）も見られた。また、企業の従業員とその家族向けの教育プログラムに活かされた事例（S285 ダイフク）もあった（【BOX21】参照）。2020年以降は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により対面でのイベントに限られたため、展示でのデータ活用（33件、24.1%）をはじめ、団体会報への掲載（12件、8.8%）、結果をまとめた報告書や発表会の開催（10件、7.3%）、パンフレット等配布物の作成（9件、6.6%）など、活動や地域の豊かさを資料等で伝える活動も多く見られた。愛知県や群馬県の博物館施設等による広域的な展示を行った事例（S032 桐生、S118 犬山、S246 サンデン）、調査結果をまとめたポスター展示や10年間の結果報告会を開催した事例（S032 桐生）、結果を活用したガイドブックの作成や地域独自の「花ごよみ」を作成した事例（S193 奥多摩、S214 千里）などがあった（【BOX22】参照）。

37サイトが選んだ「B_学校教育での活用」では、学校教育での調査体験や調査結果の活用（19件、51.4%）、学校での講演・出前授業（9件、24.3%）などの活動が見られ、次世代の環境教育において里地調査が活用されていることが分かった。水環境調査の体験を通じた中学生への環境教育活動（S234 寒風山）や、里地調査を通じた大学生の研修の場や大学祭で活用した事例（S066 奈良川）などがあった（【BOX23】参照）。

【BOX21：調査体験会や観察会の開催、ガイドなどでのデータ活用】

熊本県熊本市の一般サイト「立田山及び周辺の里地」では、調査を担う「立田山自然探検隊」が調査体験と観察会をセットにした親子向け環境教育プログラムを毎年実施し、自作の紙芝居「立田山のアカガエルのふしぎ探検」を活用し、アカガエルの生活史や生息環境などについて小さい子どもでも学習できるように工夫している（図5-21）。

石川県輪島市「トキのふるさと能登まるやま」では調査を担う「まるやま組」が里地調査の結果に加え生き物観察会で得た知識、地元の伝統的な農のある暮らしの知恵や技術を取り入れたガイドウォークを行い、生物多様性の重要性を普及啓発するプログラムを実施している。



図5-21：一般サイト「立田山及び周辺の里地」における親子向け教育プログラム。
（写真提供：倉光秀吉氏）